

大阪府医師会：「平成27年8月、大阪府医師会より、大阪府内各市町村の医師会、および大阪市内各区の医師会、57か所に対して、

電子メールにより下記情報の伝達を行った。」

大阪府・大阪市・堺市・東大阪市・高槻市・豊中市・枚方市

平成26年 感染症の動向

感染症発生動向調査委員会

感染症発生動向調査事業は医師会、大阪府、大阪市、堺市、東大阪市、高槻市、豊中市、枚方市の密接な連携のもとに実施されている。大阪府感染症情報解析評価委員会は毎週水曜日に開催され、定点の先生方からの毎週の患者情報と、大阪府立公衆衛生研究所、大阪府立環境科学研究所、堺市衛生研究所の病原体検出情報と併せて解析・評価し、還元している。平成26年の感染症発生動向調査結果の概要を報告する。

はじめに

平成26年、大阪府の小児科定点は201、インフルエンザ定点は307、眼科定点は52、基幹病院定点は17であり、前年とほぼ同様である。1年間の患者報告数は134,809人で前年より1,943人、1.4%減少した。

疾患別では感染性胃腸炎が1位であり、次いで、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、水痘、ヘルパンギーナ、RSウイルス感染症の順である。第6位以下は、咽頭結膜熱、突発性発疹、手足口病、流行性耳下腺炎、流行性角結膜炎、伝染性紅斑と続く。上位5疾患はそれぞれ全体の51.2%、15.4%、7.3%、7.2%、6.4%で、5疾患の合計が全体の87.5%を占めた。

インフルエンザ患者報告数は95,872人で、前年より40,786人、74.0%の増加であった。

麻疹（5類全数把握感染症）は46人の報告で、前年の15人より206.7%増加した。海外渡航歴のある輸入感染事例に加え、家族内感染や接触者感染も確認された。厚生労働省の麻疹に関する特定感染症予防指針

(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou21/dl/241214a.pdf>)に従い、麻疹排除に向け、予防接種率の向上、発生動向調査、ウイルス検出や遺伝子型解析迅速で適切な対応が求められる。

風しん（5類全数把握感染症）（図1）は18例の報告で前年の3,198例に比べ99.4%の減少となった。先天性風しん症候群（CRS）は1例の報告があり前年の5例より80%の減少となった。厚生労働省の風しんに関する特定感染症予防指針

(http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakuju-uhou-10900000-Kenkoukyoku/000004192_8.pdf)が平成26年4月から適用され、風しん排除に向け、鋭意推進している。

結核（2類感染症、平成25年）の大阪府における新登録患者数は2,336例（菌陰性結核陽性肺結核患者数：1,019例を含む）、前年比約3%減である。なお、罹患率（人口10万人対）は26.4（菌陰性結核陽性肺結核罹患率：11.5）であり、減少しているが、全国1位である。結核の発生動向に関する詳細な解析は下記を参照されたい。

(<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekaku-kansenshou03/13.html>、http://www.pref.osaka.lg.jp/iryo/osakakan_sensho/kekaku.html)。

感染性胃腸炎（図2）

第1位の感染性胃腸炎の患者報告数は68,961人で、前年に比し4.6%増加し、定点あたり報告数は、6.7であった。年齢別では1歳児がピークの10,253人、2歳児及び3歳児と併せた25,422人で全体の36.9%を占めた。季節別では春期に32.0%、夏期に16.5%、秋期に21.3%、冬期に30.2%、春期と冬期に多かった（図2）。17週で定点あたり11.7と最多であった。検出されたウイルスは、ノロウイルスが66株、ロタウイルスが32株、ヒトパレコウイルスが13株、サボウイルスが13株などであった。基幹定点医療機関からの届出でロタウイルス感染性胃腸炎の報告数は229人であった。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第2位のA群溶血性レンサ球菌咽頭炎は20,821人で、前年に比し14.9%増加し、定点あたり2.0であった。年齢別では4歳児、2,906人にピークがあった。季節別では、春期に28.5%、夏期に23.8%、秋期に22.1%、冬期に25.5%で春期に多かった。週別では第22週が最多で、定点あたり3.9、次いで20週の3.4であった。

水痘

第3位の水痘は9,776人で、前年に比し1.4%減少し、定点あたりで0.9であった。年齢別では3歳児にピークがあった。季節別では、春期に26.5%、夏期に24.3%、秋期に16.6%、冬期に32.6%で冬季に多かった。週別では第2週が最多で定点あたり2.3であった。また、平成26年9月19日から、水痘（入院例に限る。）は5類全数届出感染症となった。なお、平成26年10月01日から、水痘ワクチンは定期接種（対象年齢：1歳の誕生日の前日から3歳の誕生日の前日まで）となった。ワクチン導入後、重症

例を含め、今後の発生動向が注目される。

ヘルパンギーナ

第4位のヘルパンギーナは9,704人で、前年に比し29.4%増加し、定点あたり0.9であった。年齢別では1歳児にピークがあった。季節別では、春期に3.2%、夏期に91.2%、秋期に4.8%、冬期に0.73%で夏期に多かった。週別では第29週が最多で定点あたり8.8、次いで28週の7.0であった。

RSウイルス感染症

第5位のRSウイルス感染症は8,574人で、前年に比し6.4%増加し、定点あたり0.8であった。年齢別では1歳児にピークがあった。季節別では、春期に7.7%、夏期に7.3%、秋期に44.9%、冬期に40.0%、で秋期に多かった。週別では第50週が最多で定点あたり3.2、次いで51週の3.1であった。

インフルエンザ（図3）

インフルエンザの患者報告数は95,872人で前年に比し74.0%増加し、定点あたり6.0であった。年齢別では20歳以上の年代が19,492人と最も多い。次いで10～14歳、18,427人、次いで6歳児、7,193人であった。13/14シーズンのインフルエンザは定点あたり30を超えたのは第5週のみで、定点あたり30.5であった。第19週に1以下になり終息した。14/15シーズンは第48週に1を超えた（図3）。検出されたインフルエンザウイルスはAH1pdm09が146株、AH3亜型が130株、B型が86株、AH型別不能が2株であった。AH1pdm09は1月に、AH3亜型は12月にそれぞれピークがあった。今季の特徴として、流行開始が例年に比し早期であったこと、また、AH3流行株とワクチン株の相異が顕著であった。

おわりに

昭和57（1982）年に感染症発生動向調査事業を開始して32年が経過しました。この間、関係各位のご理解・支援により、貴重な調査結果が累積されています。これらの調査結果の解析や発信が医療や感染症対策に資し、府民の健康・安心・安全に寄与しています。平成27年も、ご理解・支援のほどをお願いいたします。

（文責：堺市衛生研究所
瀬尾 宗治、小林 和夫）

